



特集=希望の教育

作家・翻訳家 星川淳

天然教育

大阪府立松原高校訪問記

「こんな学校があったのか!」—松原高校の教育に触れた人は、誰も驚くに違いない。人権教育を出発点に創立されて30年、生徒たちの問題意識は地域へ、世界へと広がる。他に類を見ない生き生きとした「学び」が、そこにあった。

まず「教育」にまつわる筆者の立場を明らかにしておきたい。東京で生まれ育った私は、親の方針に沿って私立の中高一貫進学校を卒業したが、世界的に政治と文化の変革が社会を大きく揺るがせた1960年代末という時代の波をまともにかぶり、学園紛争のクライマックスともいえる安田講堂攻防戦で東大の入試が中止になった翌年、開校もない実験的な国立大学に進んだものの、2年で中退。その後は対抗文化や精神世界、エコロジカルな思索と実践、先住民文化の探究など、ほとんど「学校」の枠組みを離れた自学自習を貫きながら、同じく我流で作家・翻訳家の生業を営んできた。

いっぽう近年の教育現場からは、右傾化する社会の露払いめいた日の丸・君が代の強制、荒れる教室、凶悪化する少年犯罪といった悲観的ニュースが伝えられ、自分の子どもが就学年齢をすぎたことも手伝って、遠目に学校への諦めを強めるばかりだった。いずれにせよ、「教育」を語るにはアマチュアに近い。

ところが、そんな暗いイメージに彩られた私の学校観に、一筋の強い光が差し込んだ。04年末、ゲスト講師として参加した第3回全国教育系ワークショップフォーラムで、大阪府立松原高校の報告を聞いたのだ。そのパワフルな取り組みの紹介と、映像で見る生徒たちの輝く顔、そして報告された二人の先生方（一人は校長）の飾らない言動から、これは本物かもしれないと直感した。いや、正直なところ「希望が見えた!」と胸を打たれ

てしまったのである。しかし、この世に顔面どおりのものは少ない。報告が力強く、こちらの共感が深かったぶん、ぜひ実態を確かめたいと思った。以下に、本誌編集部との協力で実現した訪問をレポートする。

生き方を学び、学び方を学ぶ

松原市は大阪市の南東、阪南というより昔ながらに河内と呼んだほうが馴染み深い一帯に位置する。西には中世、海洋交易の拠点と自由都市で知られた堺が控え、東は生駒山系を越えて奈良斑鳩の里に続く。同じく中世以来の部落差別という重い歴史が、地域に被差別部落の点状として残る中、松原も例外ではない。市内には、現在も屠場を主な生活基盤として暮らす人びとがいる。

松原高校（以下、通称「松高」）は1974年、地元に進学できる高校を望む住民4万人の署名で創立された。折から高まりを見せた部落解放運動を背景として、「一切の差別を許さない」「一切の落ちこぼれを許さない」「地域に根ざした学校をつくる」を三大目標に人権教育の旗を掲げ、生徒一人ひとりと徹底して向き合いつつ、次々と意欲的な取り組みにチャレンジ。創設の熱が冷めかけた78年には、地元中学の生徒たちが知的障害をもつ同級生二人とともに松高進学をめざす運動を展開して、再興に一役買った。人権学習の問題意識が、部落、障害者



1年生の学期末発表大会「コンペティション2005」